

あ と が き

今年度からスタートした第7次山形県教育振興計画のキーワードの一つに、「挑戦」が示されています。本研究所の事業についても、昨年度までには実施されていなかった新たな取り組みも含め、たくさんの挑戦がありました。

まず、夏の半日研修会については、町の全教職員が谷地中部小学校に参集し、小学校では学年部会を企画し、学校の枠を超えて同一学年の担任同士が情報交換・意見交換を行いました。小さな挑戦かも知れませんが、参集型から生まれる一体感やチーム感、同一学年を担当しているという仲間意識や同僚性など、顔が見える関係性を築くことができたことの効果はとて大きく、令和13年度に迎える小学校統合に向けた大切な一歩であると思います。また、中学校部会では、県立谷地高等学校の黒木校長先生を講師に迎え、高校入選に向けて中学校に求められる対応についてご講話いただきました。これも高校入試の仕組みが変わることへの中学校としての挑戦と言えます。

次に、各研究部会並びに専門部会については、本町が抱える課題や各部会で取り組まなければならない課題の解決に向け、テーマを明確にして研修や情報交換・意見交換に挑戦しました。各部会とも充実した内容で大きな成果を上げただけでなく、来年度以降に繋がる大切な課題も明らかになりました。

それから、河北中学校の公開研究発表会においては、3名の教員が、音楽、道徳、社会の授業提案に挑戦しました。中学校教員の専門性と深い教材研究に裏打ちされた授業を参観することで、各校の教員が自身の授業デザインを見直す機会を得ただけでなく、小中学校9年間の義務教育の出口となる中学校3年生の姿を共有できたことは大きな学びです。

さらに、本町の大きな課題の一つである学力向上に繋がる授業改善を図るために、授業研協力ネットワーク作りに取り組んだことも新たな挑戦でした。授業デザインを構想するにあたり一人で悩み抱え込むのではなく、一緒に考えて欲しい、協力して欲しい教員に自ら声をかけて協働的に授業力を上げていく取り組みは、教員一人一人の主体性と自立心を育てることに繋がり、西村山地区の先進的なモデルと言えます。それに加え、町教育委員会のお二人の指導主事が「授業を考えよう会」をシリーズ化して開催したり、積極的に各校を訪問し授業参観と事後指導を行ったりしてくださいました。

今年度の町校長会の運営方針が、「前年度踏襲や現状維持は後退、攻めの校長会に」でした。その運営方針に沿う形で、本研究所の事業も挑戦を積み重ね、この紀要にはまさに攻めの内容ばかりが記載されています。明らかになった成果と課題を整理しつつ、来年度以降も挑戦そして攻めを大切に、事業が展開されていくことを期待しています。

結びになりますが、本研究所のためにご指導・ご助言を賜りました河北町、河北町教育委員会をはじめ、本研究所の事業の準備・運営にあたってくださいました全ての教職員の皆様に感謝申し上げます。

(副所長 秋場 一憲)